

「無常ということ」

2014年09月07日

『平家物語』の冒頭は「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ」である。『方丈記』の書き出しは「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀（よど）みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」である。日本文学を代表する上記二冊の書物は「無常観」を底流にしている。どんなに強力な権力も次の世代には滅していく。また、たゆむことなく流れる河のように、全てが移ろいゆく。美しく変化する四季を愛し、自然との一体化の中に救いを見出そうとした日本人の心に無常観は深く根付いている精神性であろう。

「諸行無常」は厭世観などを表すことではなく、事の道理の認識である。全ての物は生まれ、消滅していくが、そのことが苦をもたらすのではない。生滅する無常のものを常住するものとして観るから苦が生じるのである。仏教では、種々の原因と条件によって、互いが和合し合って、生じ、また滅していく様を衆縁和合と言い、この衆縁和合を諸行無常と説いている。諸行無常であるから、私の欲するようにはならないし、確たる私とか、私のものは何一つない。物は造られ、いずれ無に帰していく。この道理に目覚めることが「さととり」である。

東京新聞で、駒沢大学名誉教授の田上太秀氏が「『諸行無常』から学ぶこと」と題して、二回にわたり、上記のような「無常論」を書いている。高校生時代、お寺で聞いた教えを、沸々と思い出した。「無常の法」に乗り切った人のさとりの境地の広さに憧れた。無常の認識は誰もが持つが、私の場合、それは「厭世観」につながっていった。そして「私」という存在から離れることができなかつた。方丈の庵を編んで、無常を説いた鴨長明の京に住む友だちを思う自意識に深く共感した。

聖書も無常観を多々、記している。イザヤ書40章6節c～8節aに「肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。草は枯れ、花はしぼむが～」とある。著者の第二イザヤは戦乱に明け暮れる時代の中で『平家物語』のように世の無常を歌っている。しかし続けて、「～わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」と、神の人間への愛は変わることがないと、神の不変性を訴えている。

コヘレトの言葉1章2節で「コヘレトは言う。なんという空しさ／ないという空しさ、すべては虚しい」と歌い始め、5節～7節では「日は昇り、日は沈み／あえぎ戻り、また昇る。風は南に向かい北へ巡り、めぐり巡って吹き／風はただ巡りつつ、吹き続ける。川はみな海に注ぐが海は満ちることなく／どの川も、繰り返しその道程を流れる」と『方丈記』と同じ無常観を書いている。けれども3章10節～11節で「わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない」と、有限な人間の知ることは一部分であるが、神は時宜に適うように創造し、永遠の神を思う心を与えられたと言っている。無常の流れの中で、どんなに小さくとも、神に位置づけられる「私」の発見がキリスト教を求道する出発点になった。